

平成 16 年 5 月の解説

【5 月の天候状況】

低気圧や前線が日本海を中心にたびたび日本付近を通過したため、いつもの年に比べて曇りや雨の降る日が多くなりました。

また、太平洋高気圧の日本付近への張り出しが平年より強く、低気圧や前線に向かって吹き込む南よりの風の影響も加わって、全国的に高温となる日が多くなりました。

南西諸島では、上旬の中頃から前線の影響を受けるようになり、ほぼ平年並に梅雨入りしましたが、梅雨入り後の低気圧や前線の活動は比較的不活発で、少雨傾向が続いています。

18 日から 21 日頃にかけては、台風第 2 号の影響で前線の活動が活発になって、東・西日本を中心にまとまった雨が降りました。加えて、台風の通過後には関東地方などでは冷たい空気が流れ込んで一時的に低温となりました。

下旬の終わり頃には、一時南下していた前線が再び北上して、九州南部では平年並、九州北部・中国・四国の各地方では平年に比べてかなり早めに梅雨入りしました。

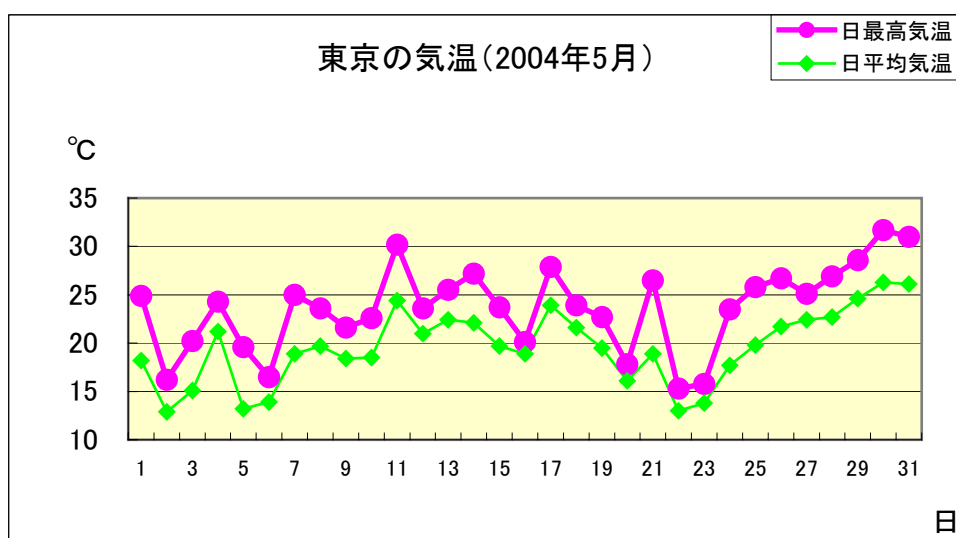
31 日は日本海側からゆっくり南下する前線に向かって暖気が流れ込んだため、東京の 9 時までの最低気温が 24.7℃と、5 月の新記録となりました。また、最低気温が高かった上に、日中の強い日差しも加わって最高気温は 30℃を超える所が多くなり、東京では 2 日続きの真夏日となりました。

【5 月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3 日～7 日目の平均）は、全国平均で例年（1992 年～2003 年の平均）より 5 ポイント高い 73%でした。地域別にみても、全国すべての地方で例年より高く、特に関東甲信地方が 9 ポイント、中国地方が 8 ポイントそれぞれ例年より高くなりました。

気温の予報誤差（2 日～7 日目の平均）は、全国平均で例年（1995 年～2003 年の平均）とくらべて、最高気温が 0.4℃大きい 3.3℃、最低気温が 0.3℃大きい 2.3℃でした。5 月は気温の変動の大きいことが特徴です。東京では、5 月としては観測史上初めて真夏日を 3 回も観測した一方、日平均気温が 15℃を下回る寒い日が 5 日もある等、気温の変動が顕著で、関東甲信地方の期間平均の予報誤差は、例年より最高気温で 1.6℃、最低気温で 0.7℃それぞれ大きくなっています。

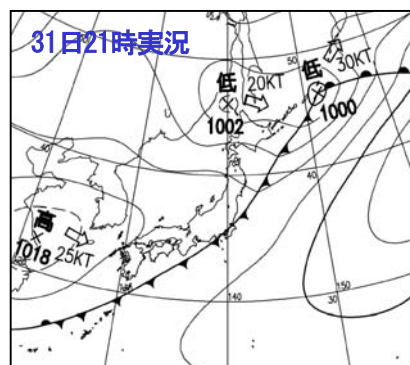
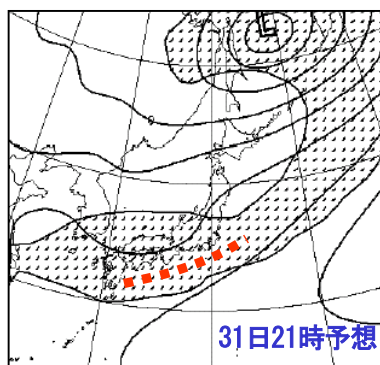
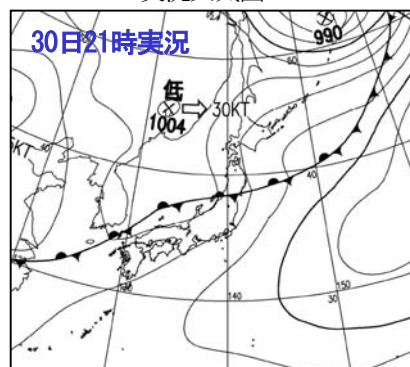
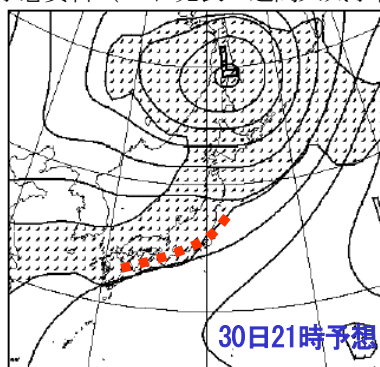
（注）例年値は気象庁 H P（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。



【5月の週間天気予報から】——前線の位置と天気や気温の予報——

予想資料（24日発表の週間天気予報）

実況天気図



影域：予想雨域

30日と31日、東京は晴れて最高気温がそれぞれ31.7℃、31.0℃の真夏日となりました。しかし、2日前までに発表した30日及び31日に対する東京地方の週間天気予報では、天気は曇りや雨で、最高気温は、30日が23～26℃、31日が22～25℃と予報していました。

左図は24日発表の週間天気予報に用いた予想資料です。関東地方で30日、31日ともに、前線の北側に広がる雨域の影響で気温が上がらないと予想しました（左図では前線に相当するところを赤い点線で示しています）。しかし、前線が関東地方の沿岸まで南下したのは31日夜となり、30日及び31日日中は晴れて真夏日となりました。前線の南下が遅くなったのは、関東の東海上に中心をもつ高気圧の勢力が強かったためです。

前線の北側と南側では天気や気温が大きく異なることが多く、前線の予想位置のずれによって、予報が大きく変わる場合があります。

【7月の天候の特徴と週間天気予報の利用に際して】

梅雨は季節が進む過程で現れる一つの季節現象です。梅雨明けについても、ある日を境にして一気に梅雨が明けるのではなく、平均的に5日間程度の「移り変わり」の期間があります。平年の梅雨明けの時期は九州南部で7月13日ごろ、東北北部では7月27日ごろです。

南の海上に台風がある場合には梅雨前線の活動に影響することがあり、日本付近の天気が大きく変わる可能性もありますので、最新の週間天気予報をご利用ください。

なお、7月における週間天気予報の「降水の有無」の全国平均の適中率（3日目～7日目平均）は、平均（1992年～2003年）で64%です。